

マイ・ストーリー

山本隆幸

やまもと たかゆき

ぼくはこんな人^{ひと}

笑顔^{えがお}がどりえのふつうの人間^{にんげん}だと思^{おも}います。けっ
こういわずなところがあります。アメリカンフットボー
ル(以下、アメフト)でも彼女^{かのじょ}でも、好き^すになつたら
それ一筋^{ひとすじ}です。自分で決めたこと^{じぶん}は、最後^{さいご}まであ
きらめずにやりとおします。基本的^{きほんてき}に冷静^{れいせい}で、試
合^{あい}で自分が失敗^{じぶん}したり、チームが不利^{ふり}な状^{じょう}況^{きょう}に
なったりしても、落ち^おついてい^{かんじょう}るほうです。感情^{かんじょう}
的^{てき}になることもほとんどありません。前向^{まえむ}きな性^{せい}
格^{かく}で、人^{ひと}に何か^{なに}いわれ^いて一時的^{いちじてき}に悩^{なや}むことがあっ
たとしても、次^{つぎ}の日^ひにはケロッとしてい^おます。だか
ら、難聴^{なんちよう}であること^{くる}を苦^{かな}しいとか、悲^{おも}しいとか思
わずに、楽^{たの}しく生^いきてこられたのだと思^{おも}います。
もちろん、難聴^{なんちよう}であること^{くる}で苦し^{ひと}んでいる人^{ひと}たち
もいます。ぼく自身^{じしん}も、意識^{いしきてき}的に苦^{くる}しいと思^{おも}わな
いようにしてきたところもあります。でも、難聴^{なんちよう}で
あることを意識^{いしき}したら苦^{くる}しくなるだけだし、何か^{なに}
あったら周り^{まわ}の人^{ひと}たちがぼくを支^さえてくれます。そ
れに、悲観^{ひかんてき}的に生^いきていたら、せつかくぼくを生
んでくれた両親^{りょうしん}に申^{もう}し訳^{わけ}ないです。

短所^{たんしょ}はずばらなところ。小^{しょう}中^{ちゅう}学校^{がっこう}の通知表^{つうちひょう}²
にはいつも、「身の回り^{みまわ}の整理整頓^{せいりせいとん}ができない」と
書^かかれていました。でも、追^おいこまれるとやるタ
イプなので、友だち^{とも}が遊び^{あそ}びに来^くるときにはちゃん

へやかた
と部屋^{へや}を片づけます。

おいたち

幼^{おきな}いころ

1982年^{ねん}に京^{きょう}都^とで生ま^うれました。小^{ちい}さいころ
は、やんちゃだっ^{きんじょ}た^{としうえ}みたい^こです。近^{きん}所^{じょ}に年^{とし}上^{うえ}の子^こ
どもたちがいっばいいて、その子^こたちといつも外^{そと}
で遊^{あそ}んでいました。
難^{なん}聴^{ちよう}だとわかつたのは、1歳^{さい}のとき^{ようち}です。幼^{よう}稚^ち
園^{えん}は、家^{いえ}からバ^{ぶん}スで30分^{ぶん}くら^いの^{ところ}にあるろ
う学校^{がっこう}の幼^{よう}稚^ち部^ぶに通^{かよ}いました。幼^{よう}稚^ち園^{えん}かよ^{とし}う年^{とし}
ごろの子^こどもたちは、毎日^{まいにち}楽^{あそ}しく遊^すんで過^すぐすの
がふつうだと思^{おも}います。でも、ぼくの幼^{よう}稚^ち園^{えん}時^じ代^{だい}
は勉^{べん}強^{きやう}ばかりの日^ひ々^びでし^{ようちえん}た。幼^{よう}稚^ち園^{えん}で徹^{てつ}底^{てい}的^{てき}に
発^{はつ}音^{おん}の訓^{くん}練^{れん}をさ^いれた^{かえ}ので^はす。家^{いえ}に帰^{かえ}って^はも、母^{はは}の
特^{とつ}訓^{くん}がま^{ほん}って^{きび}いま^ました。発^{はつ}音^{おん}の訓^{くん}練^{れん}は本^{ほん}当^{とう}に厳^{きび}
しく、つらくて、泣^なきながらや^あっていたの^{おも}を思^{おも}い^だ
し^ます。訓^{くん}練^{れん}で覚^{おぼ}えたのは標^{ひょう}準^{じゆん}語^ごです。今^{いま}話^{はな}し
て^いる^ま関^{かん}西^{さい}弁^{べん}は、ア^あメ^めフ^ふツ^つを^はじ^じめて^{とも}友^{とも}だ^ちと^た
く^{はな}さん^し話^せす^みよ^うにな^なって^なつ^つて^つから、自^し然^{ぜん}に^み身^みにつ^つき^ま
し^ました。

小^{しょう}学^{がく}生^{せい}のころ

難^{なん}聴^{ちよう}ク^くラ^らス^らがある^が学^が校^が校^がに通^{かよ}いま^ました。難^{なん}聴^{ちよう}ク^く
ラ^らス^らには、1年^{ねん}生^{せい}から6年^{ねん}生^{せい}まであ^あわ^わせて35人^{にん}く

らしいました。体育と給食の時間は、ほかのクラスの子どもたちといっしょに活動しました。小学校でのいちばん大きなできごとは、アメフトとのであいです。小学校にはめずらしく、ぼくの学校にはアメフトのチームがありました。上級生たちが練習しているのを見てかっこいいなあと思い、小学3年生のときにチームに入りました。5年生のときには、地域リーグで決勝戦まで進みました。結局、優勝はできなかったけれど、とてもうれしかったのを覚えています。

小学校でアメフトとであったことが、ぼくの人を変えたような気がします。アメフトが自分の眠っていた才能をひきだしてくれました。監督には「タカは素質があると思っていた」と言われましたが、ぼくは、アメフトを始めるまで、自分が運動神経がいいとは思っていませんでした。また、アメフトのチームメイトと接するなかで、友だちとのかかわりかたやことばのつかいかたなど、いろいろなことを学ぶことができました。アメフトを始める前は、あまりしゃべるほうではありませんでした。ケンカをするときでも、感情をことばにするのが間にあわなくて、手が先に出てしまうことがしばしばあったのです。アメフトを始めてから、そういうこともなくなりました。もし耳が聞こえていて、家の近くの小学校に通っていたら、アメフトとのであいはなかったかもしれません。アメフトは、ぼくの人生でとても大切なものです。今は、むしろ難聴でよかったと思っています。

小学校の先生たちのなかには、今でもぼくの心の恩師だと思える人がいます。1人は、アメフトチームの監督だった先生。アメフトの楽しさ

と厳しさを教えてもらいました。小さな体であちこち動きまわったり、試合の勝敗にみんなで一喜一憂したりするのは、とても楽しいことでした。でも、練習はすごく厳しかったです。先生は小学生だからといって手かげんすることはなく、鬼のように怒ることもよくありました。スポーツを真剣にやろうと思ったら、ただ楽しいだけではないということを学びました。先生がいなかったら、ぼくはアメフトを続けていなかったかもしれせん。ぼくのいちばんの恩師です。もう1人は、1年生と5、6年生のときに、ぼくの担任だった先生です。ぼくのことを自分の子どものようにかわいがってくれて、まるでお母さんのような存在でした。今でも、ときどき先生の家に遊びに行きます。

中学生のころ

小学校のすぐ近くの、難聴クラスのある中学校に通いました。難聴クラスの教室には、外の雑音を防ぐ設備が整っています。夏でも窓を閉められるようにクーラーも備わっていました。難聴の人たちは、教室の音と外から聞こえてくる音の区別がつきません。だから、ふつうの教室だと、先生の声だけを聞きとることがむずかしいのです。もし、中学校の段階でいきなり普通学級に入っていたら、授業についていけなかったでしょう。今と違って、先生の言うことを十分に読みとることができなかったと思います。

学校にはアメフトのチームがなかったので、京都市内のクラブチームに入りました。地域リーグのMVPに選ばれるなど、けっこう活躍しました。学校ではバスケットボール部に入っていたので、

平日はバスケットボール、週末はアメフトの練習と、スポーツにあげられる毎日でした。勉強の成績はいいほうでした。勉強は嫌いでしたが、追いこまれるとがんばるタイプなので、テスト前になるとちゃんと勉強していたのです。

高校生活

大阪産業大学附属高校へ

家から高校まで電車を乗りついで1時間半もかかります。家から遠い高校へ進学したのは、強いチームでアメフトをやってみたかったからです。小学6年生のとき、アメフト雑誌の記事で大阪産業大学附属高校アメフト部のことを知りました。それ以来、そういう強いチームでアメフトをやりたいとずっと思っていました。そこで、中学3年生のときに、スポーツ推薦にチャレンジして合格し、大阪産業大学附属高校のスポーツコース⁴に進むことになったのです。

高校に入って、初めてすべての授業を健聴者といっしょにうけることになりました。そのころには、アメフト仲間とのつきあいをとおして、コミュニケーションにはほとんど不自由を感じなくなっていました。だから、高校に入るにあたって、まったく不安はありませんでした。実際、何の問題もなく楽しい高校生活を送ってきました。

ぼくの高校は、校則がかなり厳しい学校だと思えます。とくに服装には厳しくて、たとえば靴は革靴じゃないと絶対にだめです。もうちょっと自由だったらいいのになあ、と思うこともあります。

高校生活は、とにかくアメフト中心の毎日、

これまでをふり返って思いだすのはアメフトのことばかりです。

アメリカンフットボール

小学3年生から今まで、10年間アメフトを続けています。中学校の途中までは、ディフェンスとオフェンスの両方をかけもちしていました。ぼくはタックルにあこがれていたのですが、小中学生はタックルが禁止されているので、かわりにタッチをしていました。でも、高校生になったらタックルがしたいと思って、途中から希望して、タックルができるディフェンスに専念することにしました。

高校に入るまでは、セーフティー(DB)というポジションでしたが、高校に入ってからコーチに勧められてコーナーバック(DB)に変わりました。コーナーバックは、判断力、足の速さ、キャッチセンス、スタミナなど、さまざまな能力が求められるポジションです。コーナーバックは相手チームのワイドレシーバーとマンツーマンでかけひきをしながらボールを奪いあいます。そこで、ぼくがインターセプトをすると試合の流れが大きく変わる。そういうところが、コーナーバックのおもしろいところです。2年生のとき、試合でたくさんインターセプトをして活躍しました。それから、ますますアメフトがおもしろくなりました。コーナーバックに変わってから自分の能力がのびたので、このポジションはぼくにあっていると思います。

アメフトは、迫力があって、男らしいスポーツだと思えます。タックルしたときなど、ヘルメットや防具がぶつかりあって、カーンと乾いた音がします。実際に音が聞こえるわけではないのですが、

しんどう かん ほし で
振動でそう感じるのです。目から星が出るほど
いた いけれど、その乾いた音の感じが好きです。

ぼくは難聴だからといって特別扱いされるの
は嫌いです。ぼく自身もふつうに生きてきたつも
りです。でも、以前はアメフトチームのなかでぼ
くだけ特別扱いされたことがありました。自分は
みんなと平等でいたいし、ふつうの人間だと思っ
てほしかったので、とてもつらかったです。高校
のチームでは、そんなことは全然ありません。み
んなふつうに接してくれるし、監督やコーチも特
べつあつかいせずみんなと同じように扱ってくれます。

アメフトをやっている、ハンディキャップを感じ
たことはほとんどありません。作戦の指示はこと
ばで伝えられるのですが、仲間たちがぼくのため
にブロックサイン(ジェスチャーを使ったサイン)
を考えてくれました。でも、一度だけ、2年生のと
きの全国大会で、プレイ中の作戦変更が、ぼくに
だけ伝わらなかったことがあります。プレイの展
開があまりに速すぎたためにぼくに伝える時間が
なかったのです。それで、ぼくはみんなと違う動
きをしてしまって、相手に点を奪われました。ぼ
くのこれまでの人生のなかでいちばん悔しかった
できごとです。逆に、今までの人生でいちばん
うれしかったできごと、アメフトのことです。高
校2年生、3年生と2年連続全国優勝を果たしま
した。本当に最高のおもいです。

しょうらい 将来について

だいがくせい しゃかいじん
大学生になっても、社会人になっても、ずっと
アメフトを続けていくつもりです。そして、みんな

みと かんべき せんしゅ
に認められる完璧な選手になりたいです。そのた
めには、走りこみとウェイトトレーニングをして、もっ
とスピードをつけることが大切だと思っています。
こうこうそつぎょうご
高校卒業後は、アメフトの強い大学に推薦⁵で
にゅうがく
入学できることになりました。しゃかいじん
社会人になっても
つよ
強いチームでアメフトを続けられるように、大学
で活躍したいと思っています。パワーが違うので
すこ
少しこわいけれど、チャンスがあればアメフト王
こく
国のアメリカでもプレイしてみたいです。

かぞく とも 家族・友だち

かぞく ぼくの家族

りょうしん あね にん かぞく りょうしん さかなや いとな
両親と姉の4人家族です。両親は魚屋を営ん
でいます。ふだんはみんな忙しくて、ゆっくり話を
する時間はありません。ぼくは、部活で帰りが遅
いので、夕食も1人でとります。でも、家族の仲は
とてもいいです。りょうしん
両親は、ぼくがやりたいことに
たい 対して、あれこれ口を出したりしません。「自分の
ことは、自分でやれ」と言います。ぼくも、両親の
そういう接しかたが好きです。ぼくにとって、家族
はいっしょにいていちばん落ちつく存在です。困っ
たことがあれば、いつでも話を聞いてくれます。
それに、アメフトを応援してくれたり、けんこうめん
健康面に
いろいろ気をくばってくれたりします。家族はぼく
の支えです。

とも ぼくの友だち

かぎ ひと しんみつ
ぼくは、限られた人と親密につきあうというよ
り、おお ひと はばひろ なか
り、多くの人と幅広く仲よくつきあっています。友
だちづきあいはたの しょうらい
楽しいし、将来のためにもなるの

ではないかと思おもいます。何なんでも言いいあえて、いつもそばにいてくれる、そんな友ともだちが多いです。友ともだちは、ぼくのこことをよりく理り解かいしてくれて、困こまったときにいつでも助たすけてくれる存在そんざいだと思おもっています。友ともだちがいいなかつたら、何なにか困こまったことがああったときなど、ももっと困こまってしまうことになりまます。それに、友ともだちがいいないと、楽たのしくありまません。よく、難なん聴ちやうのひとが1ひとり人あたら、新しゆしい集しゆ団だんに入はいっていくのはむむずかしいと言いわれまます。でも、ぼくは自みずから進すすんで新あたらしい集しゆ団だんに入はいっていかないと、友ともだちも増ふえないと思おもっています。

彼女かのじよに対する理たい想りはすりごく高たかいです。髪かみはセミロングで、ぼくのフひとァせいッかくシおんにあう人ひと。性せい格かくは天然てんねんボケ、そししてぼくにいちちずにななってくれる人ひとがいいちちばんです。

ぼくのまち、きやうと京都

京都きやうとは古ふるいお寺てらが残のこっていることゆうめいで有名ゆうめいなところところです。家いえの近ちかくは山やまばかりで、何なにもなくて、いいなかといいう感かんじです。でも、静しずかだし、きれいだし、古ふるい建たてものたたくさん残のこっていて、ととてもいいところだところと思おもいます。人ひと々びとにも活かつ気きがあります。ぼくにととって、京きやうと都とは何なんといいつても落おちつくまちです。4がつ月げつからは、京きやうと都とを離はなれて大おお阪さかの大だい学がくの近ちかくで1ひとり人ひとり暮よらしをする予よ定ていです。新あたらしい環かん境きやうで、1ひとり人ひとりでどこまたでできるか試たすチャンたンスなたので、ととても楽たのしみたのみにしてしていまます。